

ある戦争捕虜の肖像：ジャック・リヴィエールと第1次世界大戦

小黑, 昌文
駒澤大学総合教育研究部：専任講師

<https://doi.org/10.15017/26092>

出版情報：Stella. 31, pp.265-278, 2012-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ある戦争捕虜の肖像

——ジャック・リヴィエールと第1次世界大戦——

小 黒 昌 文

『新フランス評論』を舞台として鮮烈な輝きを放ちながら、38歳で他界する若き操舵手、ジャック・リヴィエール。文壇の中心に躍り出た文芸雑誌の長を勤めた彼が生前に刊行した著作は3点を数えるのみであった。溢れんばかりの才能に照らしてみれば物足りない数字ともいえるだろうし、編集長としての激務や第1次世界大戦という特殊な時代状況を考慮すれば、それでも鮮やかにみずからの思索を世に問うていたと考えることもできよう。やがて公となる膨大な量の書簡や、貴重な思索の数々を書きとめた「手帖」の存在を知ること、3冊の書物が豊かな鉱脈を、慎ましやかだが説得的に証言するものであったことが理解される。

1912年に発表された処女評論集『エチュード』は諸外国の絵画・音楽・舞台芸術・文学に関する多様な論考を収録し、批評家の開かれた関心のありようと鑑識眼の鋭さを伝えており、若き文人の面目躍如といった仕上がりであろう。いっぽう創作活動とも無縁ではなかったことは、1922年に上梓された恋愛心理小説『エーメ』によって証明されている。最晩年のプルーストが原稿に目を通して若き友人を勇気づけたというエピソードは、同書が『失われた時を求めて』の著者に捧げられているという事実とともに文学史に編み込まれている。

1918年10月に刊行された『ドイツ人』は、才気煥発な芸術論でもなければ繊細な創作の軌跡でもない。「ある戦争捕虜の回想と省察」との副題が示すように、それはリヴィエール自身の戦争体験にもとづいて紡がれた思索の書であった。異彩を放つこの一冊は、絶対的な敵＝他者としての「ドイツ人」ないしは「ドイツ精神」に注がれた冷静な観察の記録という性格を持ついっぽう、戦争を背景とした着想と執筆、刊行から再版へといたるなかで重ねられた苦悩と葛藤の結晶でもある。その意味で同書は、一文人にとっての戦争体験について考え、

さらには文学にとっての戦争について考えるための糸口を含みもった、貴重なテキストであるように思われる。今日では振り返られることのないこの「回想と省察」を繙き、開戦から間もなく百周年を迎えようとする第1次世界大戦が文学的営為に残した痕跡について考えをめぐらせてみたい。

＊

リヴィエール没後50年を機会に『新フランス評論』で組まれた特集に短い証言を寄せたポール・モランは、第1次世界大戦が深い溝となって時の流れをふたつに分断したことを強調しつつ、動乱を生き抜いた稀代の批評家について次のような評価を残している――

当時の我々に最も欠けていたのは、戦前を知り、かつ戦後も知る人間であり、鏡の両面を見ることのできる人物だった。まったくと言っていいほど自分を出し惜しみせず、非常に寛大で、大きく開かれたコンパスのようなジャック・リヴィエールは、まさにそうした人物だったのだ。¹⁾

戦争の「前」と「後」に引き裂かれた文壇におけるリヴィエールの存在意義を端的に表した一節だと言える。戦前と戦後の間にかけられた「橋」ないしは「連絡通路」としてのリヴィエール、「大きく開かれたコンパス」としてのリヴィエールは、離れたふたつの基盤に立脚して揺らぐことがなく、こと『新フランス評論』という媒体にかんしては、休刊期間という「断絶」を跨ぎ（あるいはその「断絶」によってできた時間を、来たるべき時に向けた準備として費やすことによって）、ふたつの時期をつなぐ役割を果たしたといえる。それは同時に、作家の開かれた知性と、矛盾を引き受けることを厭わぬ誠実で卓越した感性を象徴する記号ともなるだろう。しかし作家の生と思考の軌跡を考えるうえで重要なのは、穿たれた深淵の底にリヴィエールが降りたち、絶望や苦痛と隣り合わせのままにそこから這い上がったという事実ではないだろうか。

リヴィエールは、いわゆる「銃後」の人ではなく、祖国への「愛」と「献身」を胸にみずから戦場へと赴いた者たちのひとりだった。しかしその戦争体験を特徴づけたのは、塹壕で泥と血にまみれた時間や厳しい行軍ではなく、3年近くの長期にわたる捕虜生活であった。開戦直後の1918年8月3日に動員され、

ロレーヌ地方の前線に派遣されたものの、同月 25 日には囚われの身となってザクセン州ケーニヒスブリュック収容所に移送。朋友の戦死に胸を引き裂かれ、長びく戦争に心身を削りとられながら、1917 年 6 月、健康上の理由からスイスへ移されるまで、捕虜＝宙吊りの状態を余儀なくされたのである。その後 1918 年 7 月に本国送還、トゥールーズでの短い再動員の期間を経て、1919 年 3 月に動員解除となった（周知のとおり、新編集長として『新フランス評論』の復刊を実現したのは、そのわずか 3 カ月後のことである）。

『ドイツ人』は、なによりもまず、そうした長くて特異な時間のなかで蓄積していった経験と思索、複雑な感情が錯綜して紡がれた書物である²⁾。ここではまずその特色についてごく簡単に触れておこう。

200 頁ほどの厚みで生まれ落ちた戦争捕虜の「回想と省察」は、「ドイツ的なもの」あるいは「ドイツの精髓」の定義と、それに対する批判を軸としながら、色調が異なる 2 部から構成された。「ありのままに」と題された第 1 部では、捕虜時代の具体的な（過酷な状況にふと入り込む滑稽な時間も含めた）経験にもとづきながら、ドイツ的な心性の特質が描き出される。リヴィエールの特徴的なスタンスは、ドイツの残虐性や蛮行、「常軌を逸した暴力と狂気の感情」や「凶暴な気性」を強調せず、むしろその「人格の欠如」や「深い無関心」あるいは「内的な虚無」といった欠落、その「行動」の背後に広がる、起伏のない平面的な精神に着目している点であろう³⁾。批評家はここで、そうした欠落が生む「底知れ無さ」あるいは「内的な虚無」に対する圧倒的な違和感と、いい知れぬ不安を滲ませている。

いっぽう第 2 部は「彼のいうとおりならば」と題される。ここにいう「彼」とはドイツ人哲学者パウル・ナトルプを指し、1915 年 11 月にナトルプが発表した「ドイツの意志」についての論考に対する注釈（という名の反論）をおこなうことがリヴィエールの意図であった。永遠に生成を続けるドイツの精髓に無限の可能性を認め、その「若さ」を称揚しつつ、「文化」を「文明」の上位に位置づけた哲学者に対し、リヴィエールはゲーテやカント、ヘーゲルといったドイツ的な知を敢えて積極的に参照しつつ、ドイツ的な「野蛮」を描き出し、その行く末にたいする危機感を表明している。

刊行直後から反響を呼び、すぐに版を重ねて（初版は 2,200 部）、1919 年にはオランダ語やスペイン語にも翻訳されて広く読者をえた。1924 年にはいったん

絶版となるものの、間をおかず新たな序文を付して再版されている。戦後も熱を放ち続けていた反ドイツ的感情がその流れを後押しした部分もあるだろう。しかし、排他主義的な空気の中で数多く刊行されたはずの激烈な攻撃文書にはない、ある種の落ち着きを『ドイツ人』はもち合わせており、それを受容した者たちのなかには、単なる弾劾の書とは趣を異にしたその核心に冷静な眼差しを注いでいた者がひとりならずいたこともまた確かである。

ドイツでの作品受容を調査した論考によれば⁴⁾、批判の対象となったナトルプは、本書を戦争による精神の高揚と病の産物と位置づけて正面から組み合わず、『エーメ』を評価したクルチウスは意外にも沈黙を貫いた。いっぽうロマンス語学者ヴィクトール・クレンペラーは「典型的な報復の文学」、「ドイツ文化流入を拒絶する〈反スタール夫人的〉作品」、そして「独仏文化の特質と不調和をめぐる倫理的な分析」という3つの可能な読みを提示し、フランスの知が注ぐ新たな眼差しが、仏独の差異についての分析的な見識に通じていると指摘する。また、憎しみにみちた炯眼が産み落とした独創的なエッセイ（ヴェルナー・クラウス）と評価し、さらにはその非政治性を指摘し、ベルグソンの流れを汲む哲学的・心理学的議論に着目する読みもあったことは強調してよいだろう。

浩瀚な評伝を著したジャン・ラクチュールが指摘するように⁵⁾、『ドイツ人』は1949年9月に発表された「オットー・リスト」に名を連ね、占領下フランスで発禁処分を受けている。ユダヤ系作家（フロイト、ジュリアン・パンダ、アンドレ・モロワ）、共産党系作家（アラゴン、バルビュス、ニザン）、反ファシスト作家（トーマス・マン、アンドレ・マルロー）と並ぶことになったリヴィエールの『ドイツ人』は、若き日のナチス世代に強い印象を残していたことが窺い知れる。この判断の背景にあるのはおそらく、暴力的な仕打ちに対する怒りの表れというより、ドイツ的精神の特質を浮き彫りにした作家の炯眼と、結果として国家社会主義的イデオロギーに対する警鐘となりえた省察に対して覚えた空恐ろしさだったのではないか⁶⁾。

だが、3冊の著作のなかでもっとも大きな反響を呼んだ『ドイツ人』は、何よりもまずリヴィエール個人の極めて内的な要請によって生まれたものではなかったか。「嫌悪」という名の下に、なぜこの「回想と省察」は書かれなければならないのか。ここでは序文に吐露された真情に寄りそいながら⁷⁾、執筆

と刊行をめぐる内的な要請と、その懊悩に光を当ててみよう。

＊

捕囚時代に目を通していた新聞や雑誌を資料としながら構想が練られたものの（捕虜仲間たちにドイツの新聞を訳して読み聞かせることを日課としていたという）、本書が客観性を標榜した理論的なエッセイなどではなく、あくまで主観にもとづいた観察の成果であることを、リヴィエールは隠していない。あまたある糾弾の書との相違を強調する批評家は、初版の序文のなかで次のように断言している――

この書物は「ドイツに対する」審判ではない。我が国のジャーナリストや政治家たちが日々作りだしているようなたぐいのドイツ糾弾でもない。私の書物のなかには重々しい裁きの道具など見出せないだろう。私は何ひとつ断罪してはいない。たんに嫌悪しているだけだ。本書はドイツから私の精神が作り上げた大いなる嫌悪以上のものではない。⁸⁾

いささか挑発的とも取れる口調で言い切るリヴィエールは、それでも開き直りや確信からは遠いところにいた。捕虜生活を振り返り、ここに至るまでの葛藤が如何なるものであったかを切実に振り返ることに多くの部分が費やされたこの序文は、たしかに学術的な理論書の導入部とは一線を画した調子を帯びている。書かれたものを正当化することなど、まるで問題ではないかのように、吐露された憎しみや嫌悪が自分自身のものであることを正面から引き受けながら、それを公に表現することへの躊躇いと向き合い続けてきたことがあまりにも誠実な言葉で綴られる――

自分の思索を思うがままに展開する権利が、私にはあるのだろうか。[……] ドイツ人に対する憎しみを口にするには、もはや単なる戦争の傍観者でしかない自分の務めなのだろうか。[……] たとえほんの僅かであっても、世界の憎しみと苦しみが増大することに荷担する権利など、私にはあるのだろうか。すでに抹殺するのが困難を極めるこの怪物じみた存在を、私の指摘の数々で肥やしてしまうことが許されるだろうか。⁹⁾

スイスでの療養が決まり、収容所を離れたことが深い葛藤の契機であった。「行動」の意志を持ちながら、捕虜となってその可能性を奪われたリヴィエールに

として、『ドイツ人』は当初、自らの不甲斐なさを償い、屈辱と挫折を拭う手段として着想された面がある。しかし、いざ収容所からも解放され、「もうあなたの戦争は終わったんだよ！」と周囲から労いの言葉をかけられたときに溢れ出たのは、「後悔の奔流」であり、安全な場所に身をおいてしまったことに対する絶望であった。「動員解除」の歩みは、だれもが均質な過程をたどるわけではないという事実が、リヴィエールの苦悩を通して浮かび上がる。

周囲の状況に対して責任を取れないままに発言する不誠実がリヴィエールを躊躇させたのか。「敵」として眼前に立ち現れた存在について、その「真実を認識するために不可欠な自律性」を、はたして自らの思考が獲得できるのか。こう自問する批評家は、時を同じくして数多く生産されていた「戦争文学」への不信感をさりげなく差し挟みながら（この点については後にあらためて取り上げる）、さらに次のように書きつけている――

学術的な研究を装いながら、一冊の攻撃文書を、風刺文書を出版する権利が、果たして私にはあるだろうか？ 自分でも嫌悪感を覚えずには読むことのできないような、粗野で不確実な文学に、私は新たな一章を付け加えることになるのだろうか。¹⁰⁾

湧き上がる疑念は、一時的とはいえ執筆を中断するに十分な強度をもっていた。そうした感情を押し退け、自らのテキストが戦争から平和への流れと逆行することを意識していながらも、あえて執筆に踏み切った要因は何だったのか。それは例えば、社会に肥大する排他的な感情や国家主義的な要請などに求めるべきものではないだろう。序文にまで滲む躊躇いのなかで綴られるのは、戦時下の偏ったドイツ人像に修正をもたせざるような解釈であり、本来もっと複雑なはずの現実を反映した、相対的で慎重なドイツ理解を提示する可能性への期待であった。そして、この程度の手書物が刊行されたとして「なにか騒ぎが起きることもあるまい」という、なかば自分に言いきかせるかのような淡い希望も書き添えられる。しかし書くことへと駆りたてた要因はむしろ、戦争体験がもたらした精神的な窒息状態にあったと読むべきではないか。書くことの根本には、苦悩のなかで生きることへの、戦争を経てなお生き続けることへの意志があったことをまず認めなければいけない¹¹⁾。

『ドイツ人』序文に残されたリヴィエールの言葉に耳を傾けよう――

私の思考は、まるで脆弱な子供のように、成長することがなく、縛りつけられたままだった。〔…〕もはや意識に対してではなく、精神に対してかけられる耐え難い重圧を感じていた。何ものかが精神を窒息させ、麻痺させていたが、それがどんな形をしていて、どんな性質のものであるのか、最初はよく分からないままだった〔…〕。それは「胃にもたれていた」ドイツ人たちだったのだ。どんな努力をしても、彼らを消化することはできなかった。〔…〕私がこの書物を書いたのは、自分のなかからドイツ人を吐き出すためでしかなかったのだ。¹²⁾

批評家の死後、「『ドイツ人』の余白に」とのタイトルで『新フランス評論』に発表された未発表草稿にも、戦争によって被った心的外傷について語る一節が残されている――

数学的な正確さで、何かが私の後を追ってきて、うるさく責め立てていた。そして私が放棄した場所という場所に入り込んできたのだ。ものを拾うためにかがんでから、立ち上がろうとして何かが頭の上におりてきたのを感じ、もうまったく同じようには立ち上がることができない様子を想像してほしい。〔…〕その種の懊悩はあまりに根が深く、すぐには「消化」できなかった。自由になっても、私は長いあいだ、囚われの身であるように感じていた。¹³⁾

作家の感じた懊悩は、(ここでもその「消化」が拒絶される)ある種の強迫観念のようにすら読める。捕虜状態の閉塞感、絶えず攻撃に脅かされた状況に対する無力感は、必ずしも「自由」によって拭い去られるとはかぎらない。くわえてリヴィエールは、「行動」の可能性を奪われた無力な自分自身に対する絶望や憎しみに苛まれていた。

好むと好まざるとに関わらず、徹底的に向き合うことを余儀なくされた「ドイツ人」という存在の圧力が、ほとんど生理的な感覚とともに立ち現れていることが印象深い。第1次世界大戦における戦場体験が何よりもまず、泥土と水、そして糞尿に我が身をさらすことであった事実が象徴的に物語っているように、戦争による精神的な負荷はしばしば身体的苦痛と渾然一体となっていた。

「消化」しきれずに膨張を続けていた塊を「吐き出す」ことが、リヴィエールにはどうしても必要だった。吐瀉物のようにぶちまけてしまわなければ、以前のように身体を動かすことも、次なる一步を踏みだすこともできない。議論を先取りして言えば、生を再開するために個人の体験から導きだしたこの姿勢は、『新フランス評論』復刊に寄せた記事にいたって、戦争を経験したフランス文学

自体にも求められる姿勢になるだろう。

ドイツの精髓の本質をめぐる探究は、同時に、自らの身体に深く食い込んだ考察対象を全力で引きはがす試みでもあった。そして異質な他者へと切り込むその営みは、徹底した自己省察へと通じている。翻って考えれば、個人の生をめぐる思考の運動は、苦痛に抗いつつ自己の客観視を実践し、心理の襞を検証したりヴィエールの文学的な核をなしていることにも思い至るはずだ。

1924年の再版時に加えられた序文をみると、刊行当初の苦悩からいくらか時を経たことを思わせる理性的な眼差しとともに、「ドイツとフランスの拮抗」こそが本書の主題であり、「ドイツ人の肖像」は同時に「フランス人の肖像」を浮かび上がらせるのだと説いている。民族固有の心理学という問題系を意識してのことなのか、同序文には「集散的な魂の描写」あるいは「民族の肖像」といった表現が織り込まれ、学術的な色彩が添えられているかのようにも思われる。「ドイツ人」にかんするテキストは「フランス人」を主題とする構想を逆照射する¹⁴⁾。あるいは、捕囚時代の経験が「ロシア」についての思索にも通じていたことを想起することもできる¹⁵⁾。『ドイツ人』刊行に2年以上先行する1916年4月のメモには次のようにある――

外国人を理解するためには、ふたつの態度を組み合わせなければならない。まずその人間を外国人として、つまり自分とは別のものとして考えること。そしてつぎに、その外国人のなかに自分自身を発見する心構えをもつこと。¹⁶⁾

『ドイツ人』執筆の実践が、こうした志向と無縁ではないことはたしかだろう。しかしリヴィエールの声に忠実であろうとすれば、真理は同書を手に取ったアンドレ・ジッドの問いかけにこそあるのではないか――

あなたの著作を読もうとする人にとっての関心は、あなたがドイツ人を描き、ドイツ人に自己を対立させながらも、同時に自分自身を描いていることによるのではないだろうか。¹⁷⁾

そしてリヴィエール自身、対象への好奇心などという枠を大きく越えた自らの営みを次のように定義することになる――

結局のところ、この書物は私が立ち向かったひとつの冒険である。[…] 私にとって重要だったのは、自分自身を手に入れることだったのだ。私は自分のうちに、自己の漠

たる領域のうちに、ある種の純粹な視線を、観想の才を見出していた。そして、ひょっとしたらそれが、私の独創性となりうるのではないかと思えたのだ。¹⁸⁾

「ドイツ人」と向き合い、「嫌悪」という名の苦悩を人前にさらけ出そうとするその試みは、自分のなかに認めた「観想の才」あるいは「視線の純粹さ」とでもいうべきものを鮮明に把握することを目指した「冒険」だった。それをルポルタージュとよび、文学的・芸術的営為からは遠く離れたところに位置づけることはたやすい。しかし、その背景をなす赤裸々な思考の軌跡は、むしろ優れてリヴィエールのであり、文学的なうねりをなしていると考えるべきだろう。

「粗忽で粗野な文学」への抵抗を口にし、自己の内面の探究をよしとするその姿勢は、戦争が大量に産んだ「まやかしの文学」を嘆き¹⁹⁾、個人の文学がとらえる「内面性」にこそ本質があるとしたアルベール・チボーデに共鳴するものでもあった²⁰⁾。この批評家は『新フランス評論』戦後復刊第1号に「戦時中の小説」と題した記事を寄せ、次のように書いている――

〔…〕 本当の戦争文学とは、内的な生の文学であろう。極めて厳密にそう言うことができるだろうし、当初からそれを予見できたようにも思われる。〔…〕 ひとは自我の外に出ることを目的として読書する。しかし自我の外に出ることを本質とするような生活を送っているときには、自我のうちに立ち返るために読書するのだ。²¹⁾

たとえば歴史的・資料的価値をもったジャーナリスティックな言説などではなく、内的な生を描くことを本質とし、かつ、読み手を内的な生へと誘う文学――それは「戦時期に固有な調度品」にも喩えられる――にこそ、時代の要請の反映があるはずだ²²⁾。そうであればこそ、剥きだしになった内面探究の困難が綴られた『ドイツ人』に文学性を認めるのも、あながち強引なことではあるまい。他者への眼差しは、同時に自己へのそれであり、そこから紡がれる思索が文学的営為と無縁ではあり得ない。

＊

戦争に身を浸した自分の内奥と向き合い、重く深くこびりついた「ドイツ人」を「吐き出す」ことこそが、次なる一步を踏み出すためには必要だった。本来

の精神活動を取り戻すために避けては通れなかったその営みは、リヴィエールにとっての「動員解除」であり「戦争からの脱却」の試みであったといえる。批評家のこの「冒険」は同時に、『新フランス評論』復刊と新たな航海の素地ともなるだろう。

1919年6月、新編集長リヴィエールは、その名もまさに「新フランス評論」と題された記事を発表する。それは戦後の荒廃と混乱のなかにつよく響く、意志の力を湛えたマニフェストだった。ただしそれは、破壊された荒地を前提とした「新しさ」の追求を訴えるものではない。戦争に強いられたい長い沈黙を破り、満を持して打ち上げたリヴィエールの方針は、戦前に掲げていたこれまでの路線を継承しようとするものだった――

戦争がやってきた。そして過ぎ去った。戦争は、いっさいの物事、とりわけ我々の精神を徹底的に転倒させた。[……] 我々は戦争によって精神的・道徳的な錆直しをこうむったが、にもかかわらず我々はできればかつて以上に決然として――最初の計画に立ち戻る。ふたたび作りたいと思っているのは、利害を超越した雑誌であり、精神の全き自由のうちに判断し、創造し続けることができるような雑誌である。「まるで何も起きなかったかのように」振る舞うのではない。すべてのレベルにおいて、本誌特有の原則にのみ従い続けることによって、それを作るのだ。²³⁾

そしてモランの語った「コンパス」の脚が、戦争を跨いでここに新たな基盤を示す――

[……] 戦争はたくさんのものを変えてしまったかもしれない。だが、この雑誌は違う。文学は文学であり、芸術は芸術なのだ。[……] 戦争はそれらの本質を変えることはできなかった。何百万人もの死者が出たが、それにもかかわらず、作品の美はその内在的な理由に完全に依拠しているということは、いまでも昔も真実なのだ。²⁴⁾

戦前と戦後をつなぐのは文学的・芸術的美の不変に対する確信である。ただし忌まわしい記憶を早々に括弧に入れてしまい、「何も起きなかったかのように」振る舞うわけにはいかないことをリヴィエールは知っている。戦争の傷について、彼はつづけて次のように書く――

[……] 戦争の甚大な被害を忘れてはならない。もっとも深刻なもののひとつは、それが精神に取り憑いて離れなくなっていることではないか。戦争は人びとにその思考を押しつけている。彼らはもはや一人では何も発見することができない。目の前にある事

物を「あるがままに」見つめることすらできなくなったのだ〔…〕。²⁵⁾

『ドイツ人』執筆をめぐって確認したように、これはリヴィエールが戦争によって受けた抑圧にも共鳴する言葉である（「あるがままに見つめる」こととは、リヴィエールが自己のうちに可能性をみた「視線の純粋さ」に通じている）。同時にそれは、広く同時代の人々が被った傷でもあり、芸術を創造する者にとっての、果てはフランスそのもののにとっての痛みでもあった——

精神のもっとも厚く堅牢な部分に守られていながらもなお、創造の天分自体が、なにか得体の知れない彎曲を被ったのだ。この5年間にそうした天分が作りだしたものはすべて、芽生えの時点で欠陥をもっていた。はたして本当に歪みのない作品を、真っ直ぐに伸びた若木を、ひとつでも挙げることができるだろうか？ 我々の目的は、自分たちの力の限り、戦争がいまなお優れた知性に及ぼしつつけている制約——自力で抜け出すことには大変な苦勞が強いられる制約——に歯止めをかけることだ。²⁶⁾

戦争による「彎曲」と「制約」を取り払い、作品という「若木」の素直な発露の道筋をつけようという主張に、また『ドイツ人』の執筆をめぐる彼の心的・身体的な格闘——「自力で抜け出すこと」の「大変な苦勞」——に呼応する。戦争から脱するための個人的な格闘が、ここでもまた位相を変えて有効であると読めるであろう。「虚飾を完全に排した眼差し」をふたたび世界に注ぎ、「自分自身の声を聞く」ことが、フランス文学には求められている。

「マニフェスト」を掲げるリヴィエールは、フランス固有の精髓と、それが実現する文学に対する絶対的な信頼を高らかに語り、個人の生を通して実践する人間心理の探究が他に類をみない純度に磨き上げられていると指摘する。「民族」と「一個人」を思考の両輪とするかのようなリヴィエールの語りは、かつて「ドイツ人」の向こうに「フランス人」を見据え、「他者」のうちに「自己」をみた戦争捕虜の思考とパラレルに捉えることもできるが、そうした姿勢の徹底によって示された方向——「自分たちの民族がもつ、これまでになく斬新で大胆な創造的直観が、いままさに進み始めている方向」²⁷⁾——が、新たな「古典復興＝古典的ルネサンス」であり、モーラス的あるいはモレアスのなスタンスとは一線を画した「深遠で内的な」古典回帰であることは、極めて自然な帰結といえるのかも知れない。

ナショナルなもの（民族的なもの・フランス的なもの）とその偉大さへの信

頼を前面に出すいっぽう、文学が政治的・国家主義的な色を帯びることを拒否するリヴィエールは、自己の内奥へと深く降りたつプルーストの作品に理想を見出し、それを「古典的伝統」との関係のうちに描きだす。

リヴィエールとは異なり、銃後にとどまったプルーストは、それでも戦争に大きな関心を示し、それが如何に身近なものであったかを次のように語っていた――

大公妃、戦争についてはお話しいたしません。私は、戦争をあまりに完全に同化してしまったために、それだけを切り離して考えることができないのです。自分自身と区別できないほどに深く感じる感情について語りうる以上には、戦争が私のうちにかきたてる希望や心配について語ることができないのです。私にとって、戦争は、(語の哲学的な意味での)対象であるというよりも、私自身とすべての対象とのあいだに介在する実体なのです(他のことを話しているときや、眠っているときでさえ感じ続ける神経痛というものをご存じでしょう)。²⁸⁾

リヴィエールの告白を思わせるような、戦争の心的・身体的な距離の近さがことさらに強調される。それはたしかに自己と他者のあいだに介入し、肉体的な痛みのように、絶えずその存在を意識させるものだった。

ただし『見出された時』のなかでも大戦は積極的に取り上げられているが、作家自身の精神的な浄化や「嘔吐」の様相を呈してはいない。プルーストは、祖国の歴史的伝統を一身に体现する大聖堂の破壊や、各地の精神的支柱でもある「村の教会」の破壊の問題を物語のなかに取り込み、自国の歴史的記憶や「フランスの精髓」への意識という問題系を浮かび上がらせている²⁹⁾。いっぽう、物語の重要な基盤であり、主人公と深く結ばれていたはずのコンプレを戦火にさらすことで意図したのは、「私」と「大地」とのかかわりを否定し、来たるべき作家＝芸術家を、地図上の何処にもない「内的祖国」への到達へと導くことであった。行き着く先は、「フランス」でも「ドイツ」でもなく、「個」を保証する「名」すらない「私」という存在の深奥である。

リヴィエールに先んじること3年、プルーストは小説の完結を見届けることなく1922年に他界する。しかし残された原稿の出版に関わった批評家は、最終巻『見出された時』の刊行(1927年)を見届けることはできなかった。理想と位置づけた作品に描かれた戦争の破壊を、リヴィエールはどのように受けとめただろうか。それを知る機会は、残念ながら永遠に失われてしまった。

註

- 1) Paul MORAND, «Témoignages», *La NRF*, février 1975, p. 4.
- 2) 本書の執筆から刊行にいたる流れについては、例えば以下の著作に詳しい——Jean LACOUTURE, *Une adolescence du siècle. Jacques Rivière et la NRF*, Paris : Gallimard, 1994, pp. 515-537 ; Yaël DAGAN, *La NRF entre guerre et paix, 1914-1925*, Paris : Tallandier, 2008, pp. 149-181.
- 3) Jacques RIVIÈRE, *L'Allemand. Souvenirs et réflexions d'un prisonnier de guerre*, Paris : Gallimard, 1924 [1918], p. 29. 本稿では、再版時に加えられた序文も参照するため、あえて1924年版を用いる。
- 4) Hans Manfred BOCK, «La querelle de *L'Allemand*. Les réactions allemandes à la publication du livre de Jacques Rivière», *Bulletin des Amis de Jacques Rivière et d'Alain-Fournier*, n° 87-88, 1998, pp. 25-36.
- 5) LACOUTURE, *op. cit.*, p. 515.
- 6) 「フランス的な心性がドイツ的の心性に対してどのように反発するかがよく表れている」テキストとして、フランス語学習のための教科書に採用されたという事実も興味深い。Voir BOCK, *art. cité*, p. 31.
- 7) 初版に付された序文は次の書籍にも収められている——Jacques RIVIÈRE, *Une conscience européenne (1916-1924)*, Paris : Gallimard, coll. «Les Cahiers de la NRF», 1992, pp. 16-28. 編者が意図するように、リヴィエールの死後刊行された草稿で、「フランス人」と「ロシア」をめぐるふたつの文章とあわせて読むことで、その「ヨーロッパ的意識」をめぐる思想的展開について考えることができるだろう。
- 8) *L'Allemand*, *op. cit.*, pp. 21-22.
- 9) *Ibid.*, pp. 14-15.
- 10) *Ibid.*, p. 19.
- 11) 捕虜収容所時代、14冊にわたって書き連ねた手帖の全貌が明らかになったのは1974年のことだが、1915年4月5日に書きつけたメモには次のような記述がある——「いまや明白になったこの凋落、私の意志に対する現状の緩慢な勝利、それが私を恐れさせる。ここで死にたくはない。この場所で死んでなるものか。だからこそ私はこれを書いているのだ。それは治療薬のようなものだ。私が書こうとするその内容に対してである以上に、それを書くこと自体が私にとって救いとなるのだ」(Jacques RIVIÈRE, *Carnets (1914-1917)*, présentés et annotés par Isabelle RIVIÈRE et Alain RIVIÈRE, Paris : Fayard, 1974, p. 207)。
- 12) *L'Allemand*, *op. cit.*, pp. 20-21.
- 13) RIVIÈRE, «En marge de *L'Allemand*», *La NRF*, mars 1928, p. 297.
- 14) RIVIÈRE, «Le Français (extrait)», *Une conscience européenne*, *op. cit.*, pp. 28-42.
- 15) RIVIÈRE, «Russie», *ibid.*, pp. 43-56.
- 16) *Ibid.*, pp. 44-45.

- 17) André GIDE, «Lettre ouverte à Jacques Rivière», *La NRF*, 1^{er} juin 1919, p. 121.
- 18) L'Allemand, *op. cit.*, p. 10.
- 19) 「期待していたような文学を、いぜんとして大戦が直接に産み落としていないことを、人びとは折々に嘆いている。[…][戦争が新たな文学を生むことへの]期待の声は動員3日目にしてすでに聞こえてきていたが、それがもたらすことになるのは、あのまやかしの文学だったのだ」(Albert THIBAUDET, «Un livre de guerre» [1^{er} janvier 1922], *Réflexions sur la littérature*, éd. établie et annotée par Antoine COMPAGNON et Christophe PRADEAU, Paris : Gallimard, coll. «Quarto», 2007, p. 613)。「戦争のあったあいだ、人びとはその当の戦争から何か新しい文学が生まれはせぬかと毎朝期待していたものだった。だが、結果はまったくそれとは違ったものであった……」(THIBAUDET, «Marcel Proust et la tradition française» [1^{er} janvier 1923], *ibid.*, p. 733)
- 20) ちなみにチボーデ自身は1914年8月16日、40歳で応召、陸軍第60連隊に伍長として配属された。翌年10月には第260歩兵連隊に転属となり、1916年にかけて数週間ではあるが、ピカルディー地方オワーズ県で最前線に立つ。その後、1919年1月の動員解除までは、道路保全や仮兵舎の警備といった前線援護に従事。この間しばしば後衛部隊への配置換えを勧められるが、いずれも固辞したらしい。
- 21) THIBAUDET, «Romans pendant la guerre» [1^{er} juin 1919], *Réflexions sur la littérature*, éd. précitée, p. 613
- 22) 戦争文学をめぐる文学史的な位置づけについては、たとえば以下を参照——久保昭博『表象の傷——第1次世界大戦からみるフランス文学史』, 人文書院, 2010年。
- 23) RIVIÈRE, «Nouvelle Revue Française» [1^{er} juin 1919], *Études (1909-1924)*, éd. précitée, pp. 30-31.
- 24) *Ibid.*, p. 31.
- 25) *Ibid.*, p. 32.
- 26) *Idem.*
- 27) *Ibid.*, p. 34.
- 28) *Correspondance de Marcel Proust*, éd. Philip KOLB, t. XVII, Paris : Plon, 1989, pp. 175-176 [lettre à Madame Soutzo du 9 avril 1918].
- 29) この点については、拙著『ブルースト——芸術と土地』, 名古屋大学出版会, 2009年, 169-193頁, 第7章「第1次世界大戦と〈土地〉の破壊」を参照されたい。